

編纂事業の進捗状況

中 川 和 明

はじめに

早稲田大学の図書館（二号館）の中に校史資料係が設置されたのは一九六一（昭和三六）年一月である。一九六三年一二月校史資料室（教務部所管）に改称され、一九六五年二月に校史資料係（総長室直轄）となった。次いで、一九六九年六月に付属機関として大学史編集所が設置された。この編集所において『早稲田大学百年史』の稿本・正本の編集と刊行が進められ、一九九七（平成九）年九月二五日、『早稲田大学百年史 総索引・年表』が刊行された。これによつて百年史全八巻（通史五巻、別巻二巻、総索引・年表一卷）が世に出た。「本学でも、大学史は何度か試みられてはいるが、本史ほど本格的で詳細な「正史」は初めてであり、以降、本大学史の研究はすべて本史から出発することになる⁽¹⁾」と高らかに完結宣言がなされた。約三〇年間にわたつて百年史を編纂してきた大学史編集所も改組されて、

一九九八年六月に大学史資料センター⁽²⁾に生まれ変わった。それからすでに一〇年以上が経過した。学内における資料センターの役割も次第に増してきている⁽³⁾。

二〇〇七年の創立百二十五周年の際、諸般の事情によって年史編纂はなされなかった。しかし、最近二〇年ほどの間に、学部の新編など大学は急激な変化を経験した。このあたりで年史を編纂しておかなければ多くの記録・記憶が失われ、校史に空白が生じかねないと危惧されるにいたった。幸い、二〇三二年の創立百五十周年に再び年史を刊行することが理事会で決定されている。これは歴史的自己点検の機会である。本学の過去の教育・研究体制について客観的に検証することで、二一世紀の大学の指針となるような校史が期待されているといえよう。ユニバーシティ・アイデンティティを学生に自覚させることにも寄与するはずである。本稿では、二〇一〇・二〇一一年度を中心に、百五十年史編纂事業の進捗状況について概観するとともに、その過程で浮かび上がった問題点などについて述べていきたい。

一 編纂委員会と専門委員会の発足

二〇〇九年二月一日、早稲田大学百五十年史編纂準備委員会が発足した。翌二〇一〇年一月二七日・三月四日に編纂準備委員会が開催され、三月二九日付の「早稲田大学百五十年史編纂準備委員会報告」が、吉田順一（早稲田大学百五十年史編纂準備委員会委員長）より理事会に提出された。「早稲田大学百五十年史編纂委員会設置要綱」（二〇一〇年四月二三日規約一〇一八号）の第八条では、事務は大学史資料センターが行うとしている。附則に、要綱は二〇一〇年六月一日から施行すると決められた。こうして二〇一〇年六月一日、百五十年史編纂事業が正式にスタートした。編

纂委員会の設置期間は二〇三三年三月三十一日までとなっている。吉田順一⁴⁾の二論文に、二〇一〇年度早稲田大学百五十年史編纂委員会（第一回）開催までの経緯が記されているため、以下、そのあたりから記しておくことにしたい。

二〇一〇年七月二三日、二〇一〇年度早稲田大学百五十年史編纂委員会（第一回）が三号館二階第一会議室で開催された。最初に、今後、百五十年史編纂に関する事項を検討していくため、百五十年史編纂委員会の下に早稲田大学百五十年史編纂専門委員会を新たに設置することがその場で提案され、ただちに承認された。専門委員として選任されたのは、浅古弘、沖清豪、大日方純夫、吉田順一の四名である。百五十年史編纂委員会は全学的な規模のものであり頻繁に開くことはできないため、その下にある専門委員会が重要な役割をはたすことになる。この第一回編纂委員会では、百五十年史の内容・構成、資料収集の範囲や保存、編纂体制に関することなど、編纂の基本的な事項が幅広く協議されて閉会した。引き続き、同日二〇一〇年度早稲田大学百五十年史編纂専門委員会（第一回）が、同じく三号館二階第一会議室で開かれた。出席者は、この日に任命されたばかりの浅古弘、大日方純夫、沖清豪、吉田順一の四名の専門委員である。本部およびその他の箇所の文書類について保存・整理状況の把握に努めることなどが協議されて閉会した。

二〇一〇年一〇月一六日、百五十年史関係資料収集に関する懇談会が大学史資料センター所長室で開かれた。出席者は浅古弘、大日方純夫である。懇談事項は、①文書管理に関する現状調査の結果について、②資料収集について、③紙媒体以外の資料について、④その他、などである。殊に①では、監査室による「文書管理に関する現状調査」の状況について話し合われた。各部署の文書管理の実態はかなり問題があるとみられるが、詳しくは監査室によるアンケートの結果待ちということになった。また③は電子データの保存問題といった技術的な事柄であって、今後の技術革新の動向に注意すべきことなどの意見が出された。

二〇一一年五月八日、二〇一一年度早稲田大学百五十年史編纂専門委員会（第一回）が、大学史資料センター五階事務所会議室で開催された。出席者は、浅古弘・大日方純夫である。協議事項の主な内容は、①基本的な考え方にについて、②出版物の構成について、③資料収集の見通しについて、④編纂日程の見通しについて、などであった。①では百五十年史編纂について、自校史教育との相乗効果が期待できることなど基本的な方向性が話し合われた。②では、百五十年史の全体構成や、資料集・写真集などの関連出版物について協議がなされた。③では、監査室による文書保存状況に関する調査の結果が説明された。事前に予想されていた通り、保存文書目録はほとんどの箇所で作成されておらず、文書保存規程が機能していない現状などが確認された。④では、編纂日程の他に執筆者の問題や、写真の肖像権の問題など様々な事項が話し合われた。

二〇一一年秋には、全学の各部局から保存文書目録（情報資産台帳）が、大学本部に提出されることになった。紙媒体の文書と電子データの文書について、それぞれ別リストとして作成されることになっている。文書保存規程には、電子データ保存についての規程は含まれていないが、この機会に電子データの保存状況も確認することになったのである。今後、文書保存規程も実際に機能するようになるとみられる。百五十年史編纂のためには、全学に散在する資料が是非必要である。その際、資料の所在状況を把握しておくことが最も大切である。そうした意味からすれば、初めて全学的に保存文書目録（情報資産台帳）の作成に動いたことは、大きな前進であるといえよう。

二 百五十年史の内容・構成と編纂スケジュール

百五十年史の本巻について、これまで様々な協議されてきた内容の一端を説明しておきたい。未だ流動的な面も

あつて、あくまでも現時点での状況である。以下、自校史教育との関連、本巻の全体構成、編纂スケジュールの順にみていきたい。

第一に、自校史教育との関連についてである。近年、自校史教育が全国的に高まりを見せている。本学においても、二〇〇九年度からオープン教育センター設置科目として「早稲田学」が開設され、自校史教育が始まった。年史編纂と自校史教育の両者が相乗効果を上げることが期待されている。これは百五十年史の基本的な考え方の一つでもある。自校史教育と百五十年史編纂は、自らのよりどころを再確認させるよい機会になるはずである。

第二に、百五十年史の全体構成をどのようにすべきか、という点である。二〇〇九年十二月一日の百五十年史編纂準備委員会の発足以来、しばしば問題にされてきた。その結果、全体構成については、ほぼ次の二案（【A案】【B案】）に集約されてきている。

【A案】 第一卷…創立～戦前

第二卷…戦後～一九九〇年頃

第三卷…一九九〇年頃以降

【B案】 第一卷前半…創立～戦前

第一卷後半＋第二卷…戦後～一九九〇年頃

第三卷…一九九〇年頃以降

現時点では、両者の何れかに早急に決める段階ではないとみられている。両者には長短あつて決め難い故である。当分、編纂のための作業を行っていきながら、次第に煮詰まっていくなかであろうという見通しである。【A案】は、たいへんシンプルな巻構成である。それに対して、【B案】の場合、創立から戦前までの記述が圧縮される一方、戦後

から一九九〇年頃について多くの頁数を用意できるところに利点がある。というのは、百年史の問題点の一つは、戦後から一九九〇年頃までの記述に遺漏がみられるというものであった。これは百年史の第四巻・第五巻の問題点である。こうした百年史の不備を補うため、百五十年史の場合、当該期の記述を多くするという方法が一つ考えられる。

なお、【A案】【B案】の何れにするにせよ、百五十年史全体の柱立てについては早い段階から考えておく必要があると指摘されている。なお、百五十年史の索引については、Web上に掲載するという案が出されている。

第三に、大隈重信伝の位置づけについてである。百年史第一巻の紙幅の多くが、大隈重信の伝記的叙述にあてられていた。第一巻第一編序説東京専門学校創立前史を再読すれば、そうしたことに容易に気付くはずである。それでは、百五十年史の場合、大隈重信伝をどの程度扱うべきであろうか。百五十年史の場合、戦前までの記述をかなり圧縮することになるため、大隈伝に多くの頁数を費やすことにはかなりの困難が予想される。只今『大隈重信関係文書』の刊行中（二〇〇四年一〇月刊行開始、二〇一四年度完結予定）であることからすれば、従来とは大きく異なる大隈伝を執筆することも可能な研究段階にきている。このように百五十年史における大隈伝の取り扱いについては、早めに決めておくべき問題であるといえよう。

第四に、編纂スケジュールの見通しについてである。百五十年史全体は三巻構成で、各巻の刊行年は、二〇二〇年（第一巻刊行）、二〇二六年（第二巻刊行）、二〇三二年（第三巻刊行）を予定している。本巻のみで別巻は設けない。百五十年（二〇三三年）に刊行を完結させるため、かなり厳しい編集スケジュールが組まれているのである。さらに第三巻の内容の下限をどの時期までとするのか、といった問題も指摘されている。なお、後述するように関連出版物（写真集、学生向けの冊子、DVD）も計画されていて、二〇二九年頃に編集開始、二〇三二年刊行の予定となっている。

第五に、執筆体制の問題である。先に述べたように百五十年史の場合、百年史別巻Ⅰ・Ⅱ（Ⅰ・Ⅱともに部局史）の

ようなものは設けないことになっている。つまり、通史の記述の中に各部局の動向も組み込むということである。部局史的な記述については、それぞれの部局から執筆者が選出されるはずである。百年史の際、部局史をそれぞれの箇所にも全面的にまかせたため、部局ごとに記述が不統一になるといった問題も生じたとされる。百五十年史では、通史の中に部局史を組み込むことになっているが、柱立ての仕方は百年史とは大きく異なったものになるであろう。部局史を組み込んだ通史が具体的にはどのようなイメージのものになるのか、まだ具体的な協議はなされていない。なお、校史に情熱を傾けられる執筆者を選出することも大切なことであろう。最終巻（第三巻）の刊行は、約二〇年先の二〇三二年の予定である。現在四〇歳代の比較的若い研究者などの参加も期待される。この世代であれば、百五十年史全集の編集・刊行を見届けることも可能だからである。全巻に携わってもらうことで、百五十年史を一貫した構成のものにしていくことが期待されている。

三 関連出版物とWeb版のデータベース

(一) 写真集

百五十年史では、通史（本巻）に付随する関連出版物も計画されている。例えば、写真集である。創立百周年記念の際に刊行されたものとしては、大学史編集所編『都の西北―建学百年―』（一九八二年一〇月二二日）があり、写真集型の早大小史となっている。その「刊行にあたって」（清水司総長）には、「本小史は、百頁ほどの小冊子にすぎませんが、かかげられた一葉の写真、短い文章に思いを深めるとき、見る人をしてその心に強く訴え、行間に限らない広がりをもって、久遠の理想を追求してやまない早稲田人の生きざまが（下略）」とある。小冊子であっても、奥行

きのあるものにすることは可能なのである。

次いで百二十五周年の際には、『早稲田大学創立125周年記念写真集』（早稲田大学創立125周年記念写真編集委員会企画、株式会社六甲出版販売、二〇〇八年五月三二日）と『早稲田大学125年 1882-2007』（早稲田大学広報室・創立125周年記念出版委員会企画、早稲田大学発行、二〇〇七年一〇月）が作成された。前者は早稲田大学校友会の協力を得たもので純粹に写真集であるのに対して、後者の場合、写真集型の小史となっている。このように、写真集と一言でいっても小史にするか否かでかなり違ったものになるように思われる。百五十周年にも、写真集を作成すべきであるという意見が出ているが、大学が現在所蔵している写真だけでは限界がある。校友などが撮影した過去の写真が全国に埋もれているはずである。そうした写真を広く募集しながら、写真データベースを充実させていき、写真集の企画を練ることになる。また、計画的に撮影して写真を蓄積していくことも必要である。記録写真を積極的・計画的に撮って蓄積していくという発想である。但し、写真使用の場合、肖像権問題が発生する可能性もあることに注意しなければならない。

（二）資料集

校史には、しばしば資料集が付随しているものである。『東京大学百年史』や『京都大学百年史』など、そのようになっている例は多いが、本巻と資料集との関係は多種多様である。例えば、先に資料集を作っておいて、それを基に通史を作成するといった方法がある。慶応大学の場合には、慶応義塾史事典編集委員会編『慶応義塾史事典』（慶応義塾、二〇〇八年一月八日）をはじめに刊行しておいて、それから資料集を出版すると予告している（『慶応義塾史事典』九〇三頁）。慶大の資料集刊行計画は実に用意周到なものであるが、通史は作らない方針であるという。一方、早

稲田大学百五十年史の場合にも、資料集をつくるか否かについて様々な意見が出されていたが、現在、関連出版物としての資料集を刊行することは予定していない。その代わりに、『早稲田大学史記要』に資料を適宜翻刻して掲載することが計画されている。資料集を作るとすれば、翻刻校正に多大の労力を必要とするうえ、掲載すべき資料の選択をどうするかといった新たな問題も発生する。勿論、資料集は便利であり、重要なものであるが、こうした諸般の事情などから関連出版物としての刊行を行わないことになったのである。なお、『早稲田大学史記要』に散発的に掲載された資料群を後に増補して資料集にするといったことも可能であるように思われる。

(三) 学生向けの冊子・DVD

大部な百五十年史の他、学生向けに書かれた早稲田大学史の冊子なども提案されている。早稲田大学学生部『早稲田大学小史 附・早稲田大学歌集』（早稲田大学出版部、一九九八年四月一日）や、コンパクトな通史として第三版まで刷られた新書版の島善高著『早稲田大学小史』（早稲田大学出版部、二〇〇三年二月二八日）に代わるようなものが想定されているのであろう。但し、これまでの協議では、学生向けの冊子についての具体的なイメージは出されていない。また、記念映像を収めたDVDも計画されている。創立百周年の際には、『早稲田大学創立125周年記念映画『早稲田100年』（早稲田大学企画、映像プロ制作）が作成された。百二十五周年の際には、『早稲田大学創立125周年記念DVD』が作られている。百五十周年にも、こうした映像集が計画されているのである。もっとも、DVDはいつまで存続するのだろうか。二〇年後の記録媒体については想像を超えているが、動く映像の重要性は何ら変わらないであろう。

(四) Web版のデータベースの構想

最近の大学史編纂の特徴の一つとして、大学事典というべきものが付随していることがあげられる。例えば、既刊の『慶応義塾史事典』を一見しただけで、その利便性は明らかであろう。資料センターでは、Web版の早稲田大学人名データベースと早稲田大学事項データベースの二種類を計画している。既存の研究成果をベースに速やかに作成しつつも、利便性の高いものを目指している。先ず、早稲田大学人名データベースであるが、百年史での登場頻度が高い人物などから選択して載せていくといった方法が考えられる。時期を見てWeb上に公開していくのである。次に、早稲田大学事項データベースであるが、大学の組織・職制の変遷といった基礎的な事柄を優先して立項することになる。従来、各部署の変遷といった基礎的な事柄を把握することは極めて困難な作業であったが、早稲田大学事項データベースを作成することで、こうした問題も解決していくはずである。Web版で広く公開していくことによって、誤記の発見などが容易になるばかりか、紙媒体の事典と違って随時追加・修正することも可能となる。当初、公開されるものは僅かなデータ数であっても、何れ莫大なデータになっていくはずである。なお、この両データベースは、百五十年史編纂に役立つばかりではなく、資料センターの日頃のレファレンス業務にも有益なものになると期待されている。

四 関連資料の収集・整理・保存と大学史資料センター

百五十年史編纂に必要な資料としては、第一に本部資料、第二に学部・箇所資料、第三に個人資料、第四に聞き取り資料、の四種があるとされている。以下、これらの資料群と大学史資料センターの活動内容との関係について述べ

ておきたい。

第一に、本部資料であるが、これは大学本部以外にも保管されている。例えば、大学史資料センターに一時的に保管している本部資料がそれである。理事会資料（一三六冊）・評議員会資料（八八冊）、維持員会資料（二八冊）であり、これらをキャビネット三つに収納して保管している。理事会資料は旧制下（昭和八年度～同三三年度）と新制下（昭和二四年度～同五七年度）のものである。評議員会資料は昭和二六年度から同五七年度のもので、維持員会資料は明治四〇年度から昭和二五年度のものである。これらは大学の本部資料全体の一部にすぎないが、資料センターでは二〇一〇年八月一日から二〇一一年度にかけてこれらをデータベース化する作業を進めた。資料センターが預かっているこれら本部資料の多くが製本済のものである。理事会資料の場合、大型の図面などは折り畳まれた状態で製本されているため、開くことが不可能なものも多数含まれている。

第二に、学部・箇所資料（部局資料）である。従来、それぞれの箇所では整理保管されてきたが、保管体制は必ずしも充分ではなかった。しかし今後は、文書保存規程にそって保存されていくものとみられる。資料センターでは、全学的な文書保存状況の把握がなされた段階で、基本資料・優先順位の高い資料について写真撮影、マイクロフィルム化などを進めていくことを計画している。こちらから出向いて積極的に整理に関わるということである。

第三に、個人資料についてである。資料センターでは、以前から学内外に、創立者関係資料・大学関連資料・卒業生資料などの寄贈を呼び掛けてきた。しかし、自発的な寄贈者を待っているだけでは、こちらが期待しているような資料（校史に利用できる資料）が集まるとは限らない。そこで、大学の総長・理事をはじめとする役職経験者などに当たりをつけて積極的に寄贈を呼び掛ける、といった方法も考えられる。そうした個人資料の中には、会議等で配布された諸資料（重要な書き込みなども予想される）が含まれている可能性もある。なお、学内外の様々な資料を受け入れ

保存していくためにはかなりのスペースを必要とするが、一二〇号館地下資料保管室の空きスペースの問題も深刻化してきている。

第四に、聞き取り資料である。百五十年史の中の戦後の記述を充実させるために、系統的な聞き取り調査を早急に開始する必要がある。従来、文献資料を重視するあまり口述記録は軽視されがちであったが、今日、その重要性が広く認識されるようになってきている。聞き取り調査には迅速さが求められるが、場合によっては永遠に聞き出す機会を失うという恐れもあるためである。聞き取り調査の技法も研磨しなくてはならない。何を聞くべきか、事前の調査も不可欠である。証言する際の表情や語気、手振りを交えた語りなど、音声データのみでは把握できないところもある。調査の技法の深化にも心がけたいところである。なお、右の四種は年史編纂のもつとも基本となる資料群である。しかし、従来の尺度からすれば、見過ごされてしまうようなものの中にも校史編纂にとって貴重な資料が含まれている可能性がある。右の四種に限らず、幅広く資料収集することも考えなくてはならないであろう。

おわりに

以上のように、百五十年史編纂は始まったばかりで、まだ手さぐりの状態というべきであろう。二〇一〇・二〇一一年度、大学史資料センターでは本部資料のデータベース化の作業を進めたが、引き続き、基本となる諸資料のデータベース化を継続していく予定である。また、Web版の早稲田大学人名データベース・早稲田大学事項データベースの作成に向けて準備しているところである。

全学的に、大学内に散在する文書の所在確認がなされ、保存文書目録（情報資産台帳）の作成に向けて実際に動き

始めている。文書の保存状況が明確になってきたことは、百五十年史編纂に向けた大きな一歩といえよう。今後、大学文書の間保管庫や文書館（アーカイヴズ）の設置など全学的な文書の整理・保存体制の整備が待たれるところである。

文書館は大学の運営にとって不可欠の機関と認識されるようになってきている。将来、早大に文書館が出来れば、年史編纂に役立つばかりではなく、教職員・学生・卒業生、広く一般の人々に多大な便宜をはかることが出来るであろう。文書館がまだ実現していない現段階としては、当面、大学史資料センターが百五十年史関連の資料収集・整理を進めていくとともに、大学アーカイヴズに代替する役割も果たしていかなければならない。勿論、大学史資料センターに文書が自動的に移管される体制が出来ているわけではないので、こちらから各部局に向いて写真撮影やマイクロフィルム化するなど、積極的な資料収集も必要になるだろう。

大学の文書保存規程によれば、文書（原本）の保存年限は永久、一〇年、五年、一年の四種である。永久保存のものとはともかくとして、保存年限が設けられている文書が問題である。大学史のディテールを書き込むためには、永久以外の保存年限のある文書が逆に非常に大切になる場合がある。これらは文書保存規程に従う限り、次々に廃棄されていくはずである。保存期限が過ぎた文書が資料センターに移管される制度は十分機能していない。したがって、現在の文書保存規程の下で、百五十年史編纂に必要な文書を如何に選別・保存していくのかということ、これが当面の課題といえよう。

註

（一） 奥島孝康『早稲田大学百年史』の完結にあたって」（一）

九六六年二月二三日）、『早稲田大学百年史』第五卷（一九九七年三月二五日）。なお、第五卷は総索引・年表より

も半年前に刊行されている。

いる。

(2) 松本康正「大学史編集所から大学史資料センターへ」(全国大学史資料協議会東日本部会編『大学アーカイヴズ』一九九八年一〇月八日)。これは、一九九八年三月二十六日(水) 研究部会での講演の記録である。

(3) 大日方純夫「発足50年―センター」としての大学史資料センター」(『早稲田大学史記要』第四二巻所収、二〇〇一年三月三十一日)は、資料センターの歩みを振り返るとともに、大学アーカイヴズへの脱皮の必然性が説かれている。また、檜皮瑞樹「大学史資料センターの資料公開への取り組み」(『早稲田大学史記要』第四二巻所収)は、大学史編集所から大学史資料センターへの移行に伴う問題点として、第一に文書編纂機関からの脱却の困難さ、第二に資料公開機関としての未整備な状態、第三に学内文書移管の不備という三点をあげている。

(4) 吉田順一「早稲田大学百五十年史編纂の開始」(記要第四一号、二〇一〇年三月三十一日)に百五十年史編纂の開始までの経緯が説明されている。同論文では、百年史執筆関係者から聞き取った談話が、参考資料「百五十年史関連聞き取りに際して出された意見」(二〇〇九年九月一七日)として付されている。同「早稲田百五十年史編纂への取り組み」(記要第四二号、二〇一一年三月三十一日)は、それ以降、二〇一〇年七月二三日の二〇一〇年度早稲田大学百五十年史編纂委員会(第一回)の開催までの経緯を記して